



TITLE:

いわゆるブロア詩会について

AUTHOR(S):

山本, 淳一

CITATION:

山本, 淳一. いわゆるブロア詩会について. Francia 1960, 4: 1-14

ISSUE DATE:

1960-07-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137467>

RIGHT:

いわゆるブローア詩会について

山 本 淳 一

一般にブローア詩会 *le Concours de Blois* という名のもとにまとめ扱われる「同一主題」*Je meurs de soif après de la fontaine* にもとずいて、矛盾命題を展開した一連の詩篇は、ヴィヨンの一篇をそこに含むことのために、特に有名なものとなっている。

大公詩人 *Charles d'Orléans* の居城ブローア *Blois* を舞台とするこの「詩会」は、その成立事情が明らかにされるならば、十五世紀中葉における宮廷詩壇の実態についての一つの例証となり得るし、また宮廷詩人群と放浪詩人ヴィヨンとの交渉・「交渉」にわたるヴィヨンの漂泊生活の少くとも一こまを、明らかにしてくれるはずなのである、しかし、この「詩会」なるものが、いつ、どんな形で行われたかについて、正確な事情は全く知られていないし、有力な新資料でも発見されない限り、ついに知られ得ないものかも知れない。「詩会 (*concours*) 」という呼び名さえ、決定的な理由があっ

てのことではない。むしろ、それは、現在われわれが眼にすることの出来る、わずかに一篇のバラッドに対するものとしては、大げさにすぎるものとさえ言えよう。^註 このようなあいまいさに包まれていて、この詩会は、あらためて検討されるに価するものを持っている。それは、まず、放浪詩人ヴィヨンと、宮廷詩人群の二つの異質なものの接触という興味ある状況を示しているし、また、その矛盾命題のテーマが、この時代の心理の一樣相を端的にとらえさせる可能性を含んでいるからである。

註 cf. P. Champion, *son édition des Poésies de Charles d'Orléans*, Champion, Paris, 1923-27 t. I, p. 159.

成立事情についての考察

1 写本とその特徴

いわゆるフロア詩会は、今日、われわれの眼にふれる形としては、Charles d'Orléans の自家本として、P. Champion によって紹介された写本・Bibliothèque nationale fr. 25458 (一般に ms. O と略称) の p. 160~p. 173 にわたって、いく人かの異った筆跡で書かれた11篇のバラッドから成り立っている。これらの一連の詩 (Balades CXXIIIe~CXXIIIⁿ) の「写本上の特徴を」P. Champion の紹介にしたがいながら、ここにまとめておこう。

1. これらのバラッドは、ms. O において、バラッド集の最後に書きとめられており、18 ページの空白をへだてて、ヴィヨンの「Marie d'Orléans (太公 Charles の娘) に捧げる詩」につづいている。

2. 各バラッドの筆跡は、作者その人のものではなく、いく人かの写字生 scribe の手によるものと思われる。

i. Bal. CXXIII の作者 Berthaut de Villebresme の筆跡は多く残っているが、それらは、このバラッドの筆跡とは一致しない。

ii. ヴィヨンの Marie d'Orléans に捧げる詩 (Bal. CXXIII^a) とフロア詩会のバラッド (Bal. CXXIII^e) とは、同じ筆跡で書かれているが、とくに前者において、内容の無理解から来るとしか考えられない混乱が詩句の内にみとめられるので、詩人自身の筆跡と

は、とても考えられない。

P. Champion は、以上のように述べているが、(1) からは、当然の結論として、次のことが言えるように思われる。つまり、ms. O の編者(疑いなく、Charles d'Orléans 自身)は、これらの詩を、一つのまとまりとして意識する理由を持っていたということである。

(2) からは、いろいろな推論が可能であるが、確かな結論へは導きにくい。各々の詩の筆跡が異っており、しかも、その内のあるものは、はっきり作者の直筆でないものであるから、それらが、一度にまとめて書きとめられたとする理由はない。この点のみから推論すると、各バラッドの制作年代はまちまちであっても良いことになるが、それに対する反証にも充分な理由があるようである。(p. 6 以下参照) あるいは、Orléans 公が、いく人もの写字生に命じて、詩会の席上で、または、各詩人の手稿に接して書き写させておいたものを、自家詩集の内に綴じ加^{註3}えさせたのであろうか。

註1. cf. P. Champ. son éd. de Ch. d'Orl., t. I, p. 560~p. 562. この éd. は、ms. O にもとずいている。したがって、以下「ms. O」という時には、この éd. にしたがっているのである。なお、ms. O については、同じ著者の Le manuscrit autographe

de poésies de Ch. d'Orl., Paris, Champion, 1907 に詳しい。
註². Longnon-Folet 第四版の Villon: Oeuvres では、Poésies diverses, Ⅶ. Ballade (B. du concours de Blois) ; Ⅷ. Epître à Marie d'Orléans.

註³. ms. O は、^(註¹) Charles 公がイギリスから持ちかえった自作詩のノートに vélin (存牛のなめし皮でつくった上質の写本用紙) をよく度も綴じ加えて出来上ったものである。cf. P. Champ. éd. de Ch. d'Orl. t. I, Introduction, p. XIX.

2. 作者

11 篇のバラッドの内、Ball. CXXIII^a, c, d, f, i, の 5 篇は作者名を欠いている。他の 6 篇の作者は次の通りである。

Ball. CXXIII^e Villon;

Ball. CXXIII^m 第一節のみ Montbecton,

第二節以下 Robertet;

Ball. CXXIIIⁿ maître Berthaut de Villepreste;

Ball. CXXIII^r M. J. Caillau;

Ball. CXXIII^t Gilles des Ourmes;

Ball. CXXIII^m Simonnet Caillau;

このうち、Villon を除く他の 6 人は、いずれも、Orléans 公、または彼と親しい関係にあった Bourbon 公の側近たち——財務官僚・侍医 etc.——である。

無署名の作品の作者が、いつたい、どのような人々であったかは、^(註⁴) むしろ解っていない。しかし ms. O の《livre personnel》

という性格を考えると、署名の欠けていること自体が、その作者を、^(註⁵) 少なくとも消極的には規定すると考えられる。つまり、これらの詩が、Orléans, Bourbon 両公の側近詩人によって書かれたとする根拠は、ごく薄いのである。こうした固定したサークルに属する作者の名が書きとめられないことは、むしろ稀と考えられるし、また、ms. O を全般的に見渡しても、作者名の欠けている例は、この場合以外には、全くと言って良いほど見られない。^(註⁶) その上、作者名の記されている場合、それらは、Orléans-Bourbon 詩人群とでも名附けるべきサークルに属する人たちが、あるいは、le roi René のような大諸侯、Jehan Meschinot (Les Lunettes des princes の作者) のような宮廷詩人に限られるのである。

Charles d'Orléans の晩年の Blois における生活についての、伝記的記述は、遍歴の詩人たちが、彼の宮廷を、しばしば訪れたことを伝えているが、これらの無署名の作品が、そうした詩人たちの手になると考えるのは、不自然ではないと思われる。

この推定が正しいとすると、プロア詩会は、ms. O に、宮廷詩人群以外の作品のあらわれる唯一の機会である。上のような伝記的記述からすると、遍歴詩人たちの作品の ms. O におけるこうした稀少さは、むしろ不思議とさえ思われるが、これは Charles 自身の《livre personnel》としての、この写本の性質によるのであろう。それだけに、プロア詩会の作品だけが、とくに書きとめられていることには、何か特別な理由——おそらく公自身の^(註⁷)——を考えさせるものがある。

註1・宮廷詩人群以外の作者として、ヴィヨンの名だけが書きとめられているのは何故だろうか。すでに1577-80ごろに、彼の名声は広範囲にひろがっていたのだろうか。なお、詩人自身が、彼の作品 *Le Lais* (1455) の普及ぶりを暗示しているものとして、*le Testament*, 第LXXV 節に注目した。

註2・ただ *Chanson L I* の一例だけがあるが、これは、その第一節が、Charles 自身の英国幽囚中の作品 *Ball. XXXVI* に引かれており、《*Ma Dame*》が、公に書き送ったものらしい。《*Ma Dame*》は、おそらく1415 Azincourt の敗戦後、英国にとらわれの身となった Orléans 公の留守をまもった、公妃 Bonne d'Armagnac のことらしいが、Charles は、名をわけて伏せられているのである。したがって、この場合の無署名の理由は、プロバ詩会の場合と全く異なる。

註3・cf. *Constnat Beaufils: Étude sur la vie et les poésies de*

Charles d'Orléans, Paris, Durand, 1861, p. 60;

P. Champion: François Villon, sa vie et son temps, 2e éd, Paris, Champion, 1923, t. I, p. 92-98, etc.

註4・次節および「I」（八頁以下）を参照

3. 年 代

P. Champion は、プロバ詩会の行なわれた時期を、1457年12月から1460年の間と見ている。この推定の根拠となったのは、プロバ詩会の諸バラッドに、13ページの空白をはさんで先立つ、ヴィヨンの「*Marie d'Orléans* に捧げる詩」である。この詩は、ヴィヨンのプロバ詩会のバラッドと同じ筆跡であり、しかも、ms. O において特殊な筆跡であるところから、これらは、同じ写字生が同じ時期に

書き写したものと考えたのである。ヴィヨンが公女 Marie に捧げた詩については、その制作時期について二つの説が行なわれている。すなわち、1457年12月19日の Marie の生誕を祝うために書かれたとする説と、1460年7月17日の Marie の最初のオルレアン入城による特赦（ヴィヨン自身も、この時か、どうかは別として、v. 65-v. 80 においてのべているように、特赦の恩恵に浴したらしい）の行なわれたことが契機となっている、という両説がある。

詩会の時期の決定にあたって、もう一つ重要な要素がある。それは、この詩会のテーマとなった詩句《*Je meus de soit auprès de la fontaine*》である。このテーマは、Charles d'Orléans 自身の *Ballade C* (1453 年?) において、はじめであられる。このテーマと対をなすものとして、また *Ballade CXX* において、《*Je n'ay plus soit, l'airie est la fontaine*》というテーマがとり上げられる。詩会の諸バラッドの四つは、*Ball. CXXIII* が、この後のテーマにちがっている。とすると、プロバ詩会が、*Ball. CXX* の制作年代よりも以前において行なわれたとすることは考えられな。

Ball. CXX の制作時期について、P. Champion は、次のような仮説を立てているが、それは従うべきもののように思われる。

1457年6月15日に、指物師 Jacob Landeni が、プロバ城の井戸を検分に訪れ、同年5月に、《*pour visiter certain ouvrage et en-gin que ledit seigneur veut faire au puits de chateau de Blois pour tirer l'eau plus aisement*》^(註5) の報酬として金を受けとったことが記録に残されている。この事件が、Charles d'Orléans に旧作 *Ball. C* のテーマを思いおこさせ、それが同時に、彼にとって自省の機会となった、と言うのである。

この説をみとめるとすれば、プロア詩会が1457年5月以前にさかのぼらないことは確かである。そして、後でのべるように、この詩会の成立に、Charles d'Orléans（註5）自身、のイニシアティヴをみとめるとすれば、彼がプロアの宮廷に居合せた詩人たちに「longue」のテーマを与えたのは、彼自身、そうした具体的な事件を契機として、旧作のテーマに対する新しい感興をそられた時期から、そんなに遠くはないのではないか、という推測が成り立つのである。とすると、詩会が1457年中に、——Championのいう12月という期日より以前に——行なわれたのではないかという疑いが成り立ち得る。たゞ、この場合、「Maie d'Orléans に捧げる詩」と時期的に矛盾して来ないかが、問題となるが、これは、この詩の制作を、1457年12月の公女誕生の機会に、恐らく行なわれたであろう特赦がきっかけとなったものと考え、また、これらの詩が、作られた時期と、書き写され、ms. O に入れられた時期との間に、ある時間的なへだたりを置くことによつて、解決され得るように思われる。この仮説は、大膽にすぎるかも知れないが、これに従えば、ヴィヨンは1457年中の早い時期に、すでにプロアの宮廷にあり、しかも、詩会の行なわれた頃には、すでにOrléans公の知遇を失いかけていた（彼のバラッドのenvoi 中の一行）：

Que fais je plus ? quoy ? les gaiges ravoir, (Bail. CXVII^e v. 24)

が、公に対して、「扶持」の復活を請願しているらしいのであるから）。そして、その後、彼の持ち前の不品行が理由で、プロアの獄中につながれ、公女の誕生によつてそこから開放された。彼は、公女をたたえる詩をOrléans公に捧げ、それは、彼のプロア詩会のバラッドの原稿と一緒に保管され、やがて、詩会の諸作の散逸を

おそれたCharlesが、それを自家詩集に書きとめさせた機会に、一人の写字生によつて書きとられた。と言うことになる。もちろん、これは、一つの想像にすぎない。他日、何らかの新しい証拠が見出されるまで、一つの疑いとして、提出するに止めておきたい。

註1・L. Thasne は「1460年説をうる」（cf. son éd. de Villon t. I, pp. 49—50）L. Folet は1457年「1460年のいずれとも断定してゐない」（cf. son éd. de Villon, Introduction p. V）。なお、佐藤輝夫氏は、折衷説をとり、この詩の前半は1457年公女の誕生に際して、後半 Double Ballade 以下は1460年としておられる（ヴィヨンの詩研究、第四章第一節「三三三七三頁」）。問題は、公女の誕生に伴つた特赦の記録がないことなのだが、もし、それが、特赦というほど大規模ではないにしても、プロアの獄中の囚人たちに解放をもたらしたことが認められるとすれば、詩の第一句《O losee conception……》などから見て、1457年、公女の誕生にあつて、一度に書かれたと考えた方が自然なようである。

註2・P. Champ. は、彼の「F. Villon, sa vie et son temps, t. I, p. 95」において、この詩を《antérieur à 1451, mais très proche de cette date》と述べてゐる。また、彼のCh. d'Orl. のéd. のnotesでは《Peu avant 1453》。この異説は、ここに原因するのかわからないが、ms. O は、1457年代順に詩を配列し「Bail. C. が、1453年の英国王ヘンリー六世の発病と、英国の内乱の兆しに言及している、Bail. CI にすぐ先立つことから見て、後説の方が従うべきもの」である。

註3・id. éd. de Ch. d'Orl. t. I, p. 561.

註4・次節参照

註5・この推定は、必ずしも無理ではないようである。ヴィヨンの二作品および、他の一篇 (Ball. CXXIII^a) が同じ筆跡で書かれていることは、ヴィヨンの草稿と ms. O の間に、これらの三篇をふくむ中間的な稿本の存在を考えさせるからである。

4・詩会の形式

最後に、この詩会は、どのような形で、どのような規模で行なわれたのであろうか。あるいは、さきに少しふれたように、詩会などというものは全く存在せず、たゞ、同一のテーマについて、まちまちな時期に、これらの詩はつくられたのだろうか。しかしこの想像は、次の二つの理由により、根拠の薄いものとされるであろう。

A・すでにのべたように、これらのバラッドは、ms. O において、独立した一つのまとまりを成しており、それは、最初から、一まとめにされる理由を持っていたと考える方が自然である。

B・さらに、11篇のうち、Ball. CXX の模倣である一篇をのぞいて、他の10篇は、すべて、《*Je meurs de soif auprès de la fontaine*》ではじまっている。(Ball. CXXIII^a のみ、*après de* となっているが、これは単なる綴字法の問題にすぎない。) ところで、これらの作品にテーマを提供した、Charles 自身の Ball. C は《*Je meurs de soif en couse la fontaine*》を第一行として持っている。下線部に見られる、小さいが、はっきりとした、このような相違は、これら10人の詩人が、別々に、公の詩にふれて、そのテーマを借りた、としたのでは説明のつかないことである。やはり、これは、何人かのイニシヤティヴを感じさせる。つまり、詩会のテーマは、はっきり

り、《*Je meurs de soif auprès de la fontaine*》という形で、誰かによって提出されたものにちがいない。そして、この「誰か」が、Charles d'Orléans 自身であるということは、ほとんど疑いの余地のないもののように思われる。

つぎに、詩会の規模であるが、M. Schwob は ms. O に書きとめられたもの以外にも、何篇かの、同じテーマによる詩が存在することを認めているそうである。とすれば、今日、ms. O に見出される作品は、いわば秀作集なのであろうか。そして、詩会は、かなり大規模なものであったのだろうか。しかし、これらの各バラッドの詳細な検討は、むしろ逆な結論へ、われわれをみちびくようである。

この詩会の発端となった Ball. C と、詩会のバラッドとをつきあわせて見よう。この場合、Ball. CXX のテーマをとり、Ball. CXXIII^a と、論理学の術語ばかりで組み立てられた Ball. CXXIII^b を省くことにする。残された9篇のうち、8篇までにおおって、Ball. C 第一行のもろんのこととして、それにつづく v. 2 《*Tremblant de froid ou feu des amoureux*》が、そのまものの形で、あるいは変形されて、あらわれるのである。

CXXIII^a と CXXIII^b においては、原形の *me* が CXXIII^a (v. 1 n) においては、少し変形されて、

Chaut comme feu, et tremble dent à dent (v. 2) ;

Lez ung brasier, frisonne tout ardent (v. 4) ;

いずれも、詩の冒頭に置かれている。

他の詩では、v. 1 のヴァリエーションは、詩の中ほど、あるいは終りの方にあらわれるが、

Plain de moisteur, tout treublant au feu ars; (CXXII^e, v. 14)

En eau plungié, je brule tout en flamme; (CXXIII^e, v. 27)

Tant plus suis froit, plus me sens enflamer; (CXXIII^e, v. 22)

Treublant de froit en manoir chaleureux; (CXXIII^e, v. 13)

のように、明らかに Ball. C の詩句と密接なつながりを示している。

残る一例、

Loing de chault feu, je ne cesse de frire (CXXIII^e, v. 21) など、見たところ、原詩とは、まるで逆のようであるが、作者 Simonnet

Caillau にとつては、それは完全に計算されたことなのである。というのは、大公詩人 Charles の、いかにも princeらしい一行、

Aveugle suis, et si les autres maine (Ball. C, v. 3)

に対して、若ら、écuyerである作者は、

Tout aresté, sens marchier, j'on me maine; (Ball. CXXIII^e, v. 3)

と、延臣らしい姿勢で反応するのである。先の v. 21 が、同様な姿勢から出た、原詩 v. 2 の contre-partie に他ならないことは、これで明らかだろう。

このように、現存する作品が、ほとんど例外なく、Ball. C の直接の知識をうかがわせていることは、当然、この詩会に、大規模な公開的な競作とは反対の性格をあたえることになる。同時に、これは、プロアの宮廷が遍歴の詩人に対しても、開放的であったと言ふ伝記的記述を裏附けるものである。つまり、宮廷詩人群はもとより、それ以外の遍歴の詩人たちでも、Charles d'Orléans の自家詩集《ce saint livre》^(註2)に接することが出来たのである。

これまでのべて来たこと（その内には仮説の域を超えないものもある）を、一応、結論的な形にまとめておこう。プロア詩会は、1457年ごろ、Charles d'Orléans の居城プロアで行なわれた。それは、公自身のイニシヤティヴによるもので、彼の側近の詩人群、および、そのころ、彼の庇護を求めてプロアを訪れて来ていた遍歴の詩人たちも参加した。彼らは、公の自家詩集を眼にすることが出来た。彼ら詩会参加者の数は、現在の作品数を大きく超えない程度のものであった。Charles は、詩会の作品を写字生に命じて、書きとめさせておいたが、それらを後に整理させ、書き改めさせたりして、自家詩集に加えたのである。

註1・M. Schwob, Parnasse satyrique du XV^e. s. この本は手に入らなかつたので、P. Champ. の Ch. d'Orl. の éd. O. t. I, p. 362 にある簡単な言及に頼らざるを得なかつた。

註2・ball. CXXIII^e v. 2. プロア詩会のバラッドの間には含まれている無署名のこの作品は、ヴィヨンの他の詩と同じ筆跡であるため、P. Champ. は、ヴィヨン作と考える方に傾いているようである。(cf. éd. de Ch. d'Orl., t. I, p. 361 また F. Vilon, sa vie et son temps, t. I, p. 97-98) など、この詩は、プロア詩会のテーマには関係なく、Orléans 公の Ball. CIV の形式にしたがっている。

Ⅱ 作品

1. プロア詩会のみなもと——

Charles d'Orléans の Ball. C-JCXX.

プロア諸会の各作品に対して、Charles d'Orléans の Ball. Cが「鍵」を提供することは、これまで述べて来たことから明らかである。別な言い方をすれば、プロア詩会は、大公詩人 Charles の内面生活のうちに、最初の萌芽を持ったのである。十五世紀の詩に接するとき、ほとんど例外なく読者を打つ、矛盾の感覚が、Charles をもたらえていた。「あらゆるものが永遠の対照、多彩な様式という印象を与えた。」とホイジンは、この時代の様相について語っている。それは、王候貴族のおどろくべきせいたくさと貧民の並はずれた悲惨さ、深い信仰とおそるべき残忍さ、という様に、生活のあらゆる面にみられる対照であった。こうした烈しい対照が生み出す矛盾の感覚は、しかし、nonchalant に生活の理想を求めたこの老貴族の内面生活においては、一種の温和な懷疑主義へと育って行く。

《Je meurs de soif en couste la fontaine》この矛盾命題のテーマが、どのようにして詩人の心に浮んだのか、われわれはもちろん知らない。しかし、それは、単なる思いつきを超えて、もつと深い彼の内心の動きを反映していたのである。Charles は60才になろうとしていた。英国での幽囚生活の内にあつて、《Belle, bonne, nompareille, plaisant》への恋心を歌いあげるのが時を過していた詩人も、内へ眼を向けることがようやく多くなつて行くのである。

ある。「詩の調子は変る。」と、J. Charpentier は言う。「それは、もはや、単に希望とか絶望とかに關するのではなく、それらの葛藤・相剋を知り、それらの斗いを見つめて来た精神のものなのである。実際、いまやオルレアン^(註)の思想には、憂愁と苦惱・希望と慰めが染みこみ、それらが交互に、あるいは、矛盾対立の形をとつてあらわれるのである。」その表現が、矛盾命題の展開という形をとつたこと、そこには、中世的発想法の一つの例証が見られる。「中世の人々にとっては、象徴や比喩は、たとえ甚だ残薄に表現されていても、我々の想像するよりも遙かに生き生きとした感情を呼び起したことは勿論である。象徴化したり、擬人化したりする機能は大いに進んでいたから、すべての思想がほとんどおのずから舞台上の人物と化し得た。」したがって、Charles d'Orléans にとつても、このように対立概念の羅列によつて自己を表現することは、必ずしも、自分を窮屈な枠にはめこむことではなかつたのである。

Ball. C は、事実、彼の他の作品の多くと同じ様に、非常に《per-sonnell》な詩である。

Aveugle suis, et si les autres maine;

Porte de sens, entre saichans l'un d'eux; (v. 3-4)

この二行に見られるのは、大諸候として、そして知識人としての感慨に他ならぬ。

Trop negligent, en vain souvent songneux; (v. 5)

Je gaigne temps, et pers mainte semaine; (v. 8)

Je parle trop, et me tais a grant paine; (v. 15)

ここには、Charles d'Orléans の自画像がある。これらの詩句は、

対立概念の羅列に終ってはいない。むしろv.15に見られるように、詩人は、対立命題を投げすててさえ、自分を語るのである。

前に述べたように、フロア城中の井戸の故障という偶然の出来ごとが、Charlesに、このテーマを、もう一度とりあげさせることになる。彼は、まず、Ball.Cに對する contre-partie として、Ball.C-XXを意識している。この二つの作品は、各行がかなり完全な対応を示している。殊に冒頭の一節、

Je n'ay plus soit, l'airte est la fontaine;

Bien eschaufé, sans le feu amoureux;

Je voy bien cler, ja ne fault c'on me maine;.....

C'est de mon fait une chose meslee,

Ne bien ne mal, d'aventure menee. (v.1-3, 6-7)

註¹ Ball.C 第一節：

Je meurs de soit en couste la fontaine;

Tremblant de froit ou feu des amoureux;

Aveugle suis, si les autres maine;....

C'est de mon fait une chose faïee,

En bien et mal par Fortune menee. (v.1-3, 6-7)

のはば完全な裏返しである。

Ball.CXX 註² 一番煎じの作品の、のがれられない運命をたどるように見える。ここには、Ball.Cにあった、あの spontané な魅力は少ない。そして、実感に裏づけられた言葉の代りに、Folie, Sens, Nonchaloir, Ris, Jeux.....etc. の擬人法が前面に押し出されて来る。なるほどホイジンの言うとおり、擬人法は中世末期において、今日ほどびからびた感じは与えなかったではあろう。しかし、

Ball.CXX は、その感動の新鮮さという点で、Ball.C に大きく劣るのは止むを得ないのである。

精神的内容の面では、この二つの詩の間に差異は殆んど見られない。形式上の対照にもかかわらず、精神面では両者は、ほとんど同質のものである。詩想の展開につれて、Charles は、ときに、形式的対応を忘れてしまいつちえる。第二節からの二行をつき合せて見よう。

Desplaisance j'ay d'esperance plainie;

J'atens bon eur en regret engoiseux;

(Ball.C, v.10-11)

Espoir et Dueil me mettent hors d'alaïne;

Eur, me flatant, si m'est trop rigoureux;

(Ball.CXX, v.10-11)

後者は、前者に対立するのではなく、むしろ、その展開・繰り返すにすぎない。Ball.CXX 註³ Ball.C と同じ感情の内に根を下ろしているのである。

註¹・ヨハン・ホイジンガ著、兼岩正夫・里見元一郎訳、「中世の秋」創文社、昭33、第一章、四頁、

註²・Ch.d'Orl., Ball.I, éd. Champion, t.I, p.17.

註³・Jacques Charpier, Charles d'Orléans, Paris, Seghers, 1958.

p.71.

註⁴・ホイジンガ、上掲書、第十五章、三〇八頁。

2. プロア詩会の作品間の精神的つながり

すでに述べたように、プロア詩会に参加した詩人たちは、Charles d'Orléans の作品に直接ふれることが出来た。この直接の接触が、彼らの作品に、どのような痕をこめて残しているだろうか。つまり、彼らは、Charles d'Orléans の作品によって、どの程度まで影響されているのだろうか。また、彼らがどの程度の間に、影響なし、相似した傾向があるのだろうか。彼らのバラッドがとりあげられる矛盾論の面で、この影響関係を調べて行こう。

この検討から、Ball.CXXIII は当然の如かれる。この論理学用語による戯詩は、その第一行以外、他の作品と何ら精神的つながりを持たないからである。Ball.CXX のテーマをとった Ball.CXXIII については、Ball.C と Ball.CXX の精神的同質性が明らかにされた以上、他のバラッドと同じに扱ってよい。(ただし、Ball.CXXIII が、Ball.CXX にもあてはまる Ball.C にはない詩句を模倣することのみ注意すれば良い。——実際には、そうしたケースはなかった。)

プロア詩会の諸バラッドが、お互いの間に、また、Charles d'Orléans のバラッドとの間に、相似の、あるいは明らかな対照(前にのべた Ball.CXXIII, v.3 のような場合、p.参照)を示めず場合を、まず数量的に検討して見よう。なお、この場合、詩会のテーマそのものである。各バラッドの v.1 は、検討の対象からは除くのが当然と思われる。

検討の結果を次の表に示す。

作品番号	C	X	X	III	C	D	E	G	H	J	K	I	M
作者	/	/	/	/	Villon	/	Montbeton et Robertet	Bertbault de Villebresme	J. Caillau	G. des Ourmes	S. Caillau	計	
総行数	27	27	27	34	27	30	27	34	28	27	288行		
二つ以上の作品 で、相似または 対照を示す詩句	13	16	3	24	11	13	17	16	10	134行			
B.C (B.CXX)	4	4	2	9	3	2	7	9	6	4	52行		
と相似または対 照を示す詩句													

※1. 各項とも、各バラッドの v.1 を除く。

2. テーマが refrain にあらわれる場合は、何度くり返されても一行にかぞえる。

(a) Charles d'Orléans の Ball.C (CXX) と詩会のメンバー。

Ball.C が直接に、あるいは Ball.CXX を介して、詩会の各バラッドと、相似または対照的な詩句を分ち持つ場合は、のべ行数にして52行である。これは、二つ以上のバラッドにおける相似・対照テーマ総行数(134行)に対しては38.8%になる。また、これを Ball.C を中心として考えると、総行数28行のうち、11行(39.3%)が、詩会の他のどれかのバラッドに繰り返されていることになる。このことは、Ball.C の他のバラッドへの影響・相似関係が量的には、か

なり大きなものであることを示している。

Bal. C の諸テーマのうち、他のバラッドにおいて多く繰り返されるものは、

1. v. 9—11 (この三行は、それぞれ別なテーマといふよりは、一つのテーマの展開と考えられる。)——10 篇すべてに。

Je joue et riz, quant me sens douloureux;

Desplaisance j'ay d'esperance plainne;

J'arens bon eur en regret engoisieux;

2. v. 19——10 篇中 5 篇。

Maladie m'est en santé donnee;

3. v. 16——10 篇中 3 篇。

Je m'esbays, et si suis courageux;

などである。

これらのテーマが、多く繰り返されるのは、しかし、それらの平凡さという案外な理由によるようである。つまり、多くの矛盾問題をならべたてような時、これらは比較的誰でも思いつき易いテーマなのである。この考察は、Bal. C の影響を、質的には、かなり減殺する方向へ働くのである。事実、詩人たちの多くは、これらのテーマの平凡な焼き直しに終っている。例えば、B. C. v. 9—10 と相似の詩句を二、三ひろって見よう。

Tout mal, tout grief, m'est doux et savoureux;

(Bal. CXXIII^e, v. 5)

Remply de duel, vouloir me prent de rite;

(Bal. CXXIII^m, v. 4)

これらの単純な詩句の内では、やはりヴィヨンの換骨奪胎ぶり

が、水際立っている。

Je riz en pleurs, et attens sans espoir;

Confort reprens en triste desespoir;

Je m'esloys, et n'ay plaisir aucun;

(Bal. CXXIII^e, v. 6)

前出の表で、Bal. C と相似の詩句数が 9—2 とかなり大きな開きをみせている。これは、一見 Bal. C の各バラッドへの影響の強弱の度を示すように見える。しかし、詳細に検討して見ると、この行数の差は、Bal. C. v. 9—11 のテーマが、各バラッドでどの程度に展開されているか、といふことから来ていることがわかる。

作品番号	C												
	X	X	III ^b	c	d	e	g	h	j	k	I	m	
A. Bal. CCXX			4	4	2	9	3	2	7	9	6	4	
B. Bal. C. v. 9—11 の風調と照られる詩句数													
A—B	3	1	1	5	2	1	4	3	3	1			

詩会に参加した各詩人に対して、Bal. C は、ほぼ平均した影響を与えたに止まることは、上の検討から明らかである。また、矛盾命題のテーマは、ヴィヨンが《Je riz en pleurs》と歌うような、感情の相題という点において、一番の多く詩人たちの心を占めたこともわかるのである。

⑥ 詩会のバラッド相互間の精神的つながり。

詩会のバラッドの総行数38行に対して、相似・対照詩句数134行というのは、35.2%という大きな割合になる。つまり平均して2行に1行弱の割合いで。他の詩人と同じテーマがあらわれるのである。134行中、Charles d'Orléans の Ball. C と関係づけられるものは52行であるから、Ball. C を介さないで、詩会に参加した詩人たちが、おたがいに関係のテーマをとる場合は、Ball. C に従うケースの、約1.6倍の頻度があることになる。

これらの相相似度から、しかし、詩会に参加した詩人たちの間に、はっきりした影響関係があったことを示すものと、直ちに断定するわけには行かない。それは、相似テーマの性質を考えてのことである。すべての例を引くわけには行かないが、一、二の例をあげてみよう。

1. Tant plus mengue, et tant plus ie me affame;

(Ball. CXXIII^e, v. 2)

Tant affamé en mengier sumptueux;

(Ball. CXXIII^e, v. 2)

2. Je treuve doux ce qui doit estre amer;

(Ball. CXXIII^e, v. 2)

Ce qui est doux, m'est plus amer que suye;

(Ball. CXXIII^e, v. 19 および CXXIII^e, v. 27)

これらのテーマは、すべて、明らかに影響関係を結論するにはあまりにも平凡である。むしろ、それは、十五世紀の時代相・心理相という、もっと奥深いものの影響、あるいは、そのころ存在した、ことわざ・格言的な locution の影響といった面で考える方が

自然のようである。同様な精神的風土の中にある詩人たちが、矛盾命題のバラッドというような形にはまった詩に立ち向うとき、それらが、おたがいに似てくるのは、むしろ当然のなりゆきではないだろうか。たゞ Ball. CXXIII^e, 1, 2, の三篇——作者は、いずれも Orléans 公の側近——については refrain の類似していることなどから見て、もう少し密接な影響関係が認められるように思われる。

3. 必ずしも——二つの場合 Ball. CXXIII^e 4

CXXIII^e (v. 7, 8)

プロア詩会の主題となった fontaine のテーマは、いわば、十五世紀という時代に広く存在した矛盾感情が、Charles d'Orléans の内面生活において結晶したものと言える。彼の精神の様相と深いつながりを持つものだっただけに、詩人 Charles は、このテーマに強い愛着をもったようである。それが、彼に、同じテーマを再びとり上げさせ、また、彼のまわり——詩・芸術を愛する人々に自由な門戸を開いていた彼の宮廷——に集ってくる詩人たちにも、それを提示させたのであった。それは、おそらく間違いないに、彼が詩会の諸作品を、彼の《livre personnel》の内に書きとめさせた理由だったに違いない。

詩会に参加した詩人たちの多くには、この矛盾感情の深さは良く感じられなかったらしい。彼らは単調で平凡な言葉の遊技に終始している。しかし fontaine の主題は、時代の心理相の一断面を浮き彫りにするものであっただけに、鋭敏な感受性の持主に強く訴えるものを持っていた。われわれは、この詩会から、二つのすぐれた贈物をうけることが出来る。二人の放浪詩人が、このテーマに従っ

ですぐれたバラッドを歌い出したのである。そのうちの一人は、もちろんヴィヨンである。

作者不明の Ball. CXXII¹ とヴィヨンの Ball. CXXIII¹ は、この詩会の二つの珠玉と言えよう。しかも、この二つの詩は、非常に対照的な性格を持っている。つまり、ヴィヨンの詩が、他の詩人のバラッドと、最も共通テーマが多いのに対して、Ball. CXXIII¹ は、最も、他のバラッドに似るところの少ない、《personnel》な性格をもっているのである。

「プロア詩会のバラッド」におけるヴィヨンの姿勢は、一言で言えば、ヴィルチュオーゾとしてのそれである。彼は、矛盾命題の展開ということ自体に、技巧派詩人的な興味を明らかに示している。Charles d'Orléans の詩想を、彼は自由に発展・展開させ、格言・ことわざ的詩句を自在にあやつる。彼の筆にかかると、詩句は動きを増す。

Au point du jour diz: Dieu vous doit bon soir; (V. 16)

Que fais le plus? Quoy? les gaiges ravoïr; (V. 24)

口語的な、こうした軽快な詩の運びは、「形見分け」の詩人にふさわしい。

Echoïete actens, et d'homme ne suis hoïr;

軽妙さと皮肉の混り合いである「形見分け」の精神が、ここにも見られる。「遺言書」の悲痛な叫び、辛辣な諷刺は、まだ姿をあらわしていない。もちろん、苦い感慨が、詩のどこどころにあらわれないわけではない。たとえば、彼の一生を端的に表現するものとして良く引かれる《Je ris en pleurs》のような詩句も、ここにはある。しかし、この一句とて、その内包する所はとにかく、表現

としてはヴィヨンの独創ではない。それは、Charles d'Orléans のバラッドにすでにあるし、それ以上に、中世末期の詩にしばしばあらわれる表現の一つのヴァリエーションなのである。ヴィヨンは、矛盾感情を、後に「遺言書」や後期の諸バラッドにおいてほどは、深くうけとめてはいないようである。彼のバラッドが、彼の内面生活について語るところが少くないにしろ、このバラッドは、まず、ヴィルチュオーゾの手になるものとして理解されねばならない。

Ball. CXXIII¹ の無名の作者は、fontaine のテーマを、彼自身の生活において深くうけとめる。この放浪の詩人は、苦しみ多い生活——その内で、彼は罪にもおちたらしい。——の一時の休息を、プロアの宮廷に求めたのだが、それは、いつ荒らされるかも知れないか、そのための休息にすぎない。

Pay pris treves affin que on me attaine,

Dis-mul int, faut que le hurt attende, (V. 3—4)

彼も又、涙のうちに笑うのだが、

En courroux faint covertement me joue (V. 14)

その調子は、ヴィヨンのバラッドにおけるよりも、さらにもう一段沈んでいる。ここには、ヴィヨンが「遺言書」の最も悲痛な詩句にさえ示す、あの衝気とでも言いたい気取りがない。詩人は、自分についてしか語らない。矛盾感情は、詩のテーマというよりは、彼自身のうちに生きているのである。

このバラッドは、たしかにヴィヨンのそれに一歩もゆずらない高い出来栄を示している。ヴィヨンのあの才気は感じられないが、その代りに、沈潜した観察の深さにおいて、ヴィヨンをしのいでいる。

Charles d'Orléans においては、温和な懷疑主義に育って行った、「中世の秋」の特徴そのものである矛盾感情は、二人の放浪詩人において、特に Bail. CXXIII の無名の作者において、はるかに深く暗い音色の反響を見出すのである。

プロア詩会は、文学史的には、小さな事件にすぎない。しかし、映画の短いカットが、全体の流れに、時として、鋭く光をあてることが出来るように、この、矛盾命題の展開という、当時として珍らしくはない形式をかりて行なわれた詩会も、その内に、すぐれた作品を含むことによって、中世末期の心理相の一面を、鮮かに浮きあがらせるだけのものは持っているのである。

註一 ホイジンガ、上掲書、第二十一章 四五頁以下参照

註二 J.-M. Bernard は、このバラッドをヴィヨン作と推定した (François Villon à la cour de Blois, *dans la Revue d'histoire littéraire de la France* 1908, p. 497—500) °P. Champion は、これに反対の立場をとっている (F. Villon, *sa vie et son temps*, t. II, p. 98, note)。詩の調子における差異から考えても、この詩を、「プロア詩会のバラッド」と同じ時期のヴィヨンの作と考えることは自然ではないようである。